

令和4年度 第1回 大阪府立茨田高等学校 学校運営協議会 (議事録)

令和4年6月30日(木) 15:30～

大阪府立茨田高等学校 会議室

出席者(敬称略): 藤原・山下・松井・西本・野崎(本校)

川村・・早坂・寺野・渡邊・綿世・村井(協議委員)

記録: 西本

1. 挨拶(藤原校長)

2. 茨田高校より

* 自己紹介(協議委員・教員)

学校経営計画及び本校の現状について

* 令和3年度学校経営計画及び学校評価(自己評価の欄について)

「先生の指導に納得できる」の数値、目標を下回った。令和2年度結果よりも下がっている。この結果は真摯に受け止め、早急に対応していかなければならないと考えている。「授業内容に興味関心がある」の数値としては下がったが、高い水準を保っていると評価できる。進級率に関しては、改善しているとまではいえない。欠席の防止や生徒の評価方法には課題が残ったと認識している。部活動入部率は22.8%であった。R4当初の感触では、さらに低下している模様。「担任以外に相談できる人がいるか」については、「いる」が7割を超えているが、25%以上が担任以外に相談できる人がいない状況ともいえる。改善する必要があると認識している。

* 令和4年度学校経営計画及び学校評価

最後の3年となった今、執念でなんとかしていきたいと考えている。生徒満足度を上げる取り組みをとにかくやっていく一心である。その中でも肝になるのは、進路指導と学校行事である。

今年度入学生は半数が不登校経験生徒である。茨田高校になっても不登校となっている生徒も多くいる中で、教員定数が減っている中で生徒の対応に苦慮している。多くの経験のある教員が転出していったことで、なかなか苦勞している。しかし、生徒にとって、それは関係ないと考えている。

進級率をとにかく上げていきたい。不登校生徒にできることはなんでもする。情報共有を密にするなど生徒相談体制をさらに強化する。

* 新型コロナの状況改善を受けて2年ぶりに体育祭を開催

3年生は、入学以降上級生の体育祭を見ていない中で、十二分に頑張ってくれ、とてもいい体育祭となった。

* いじめアンケートについて

どんなに小さいいじめの芽も見逃さないことをめざして春のアンケートを実施した。生徒数減に

より、回答数が非常に少なく、有用な情報も記載はなかった。これに慢心することなく、より鋭いアンテナをはって、適切に対応できるようにしていかなければならない。

*教科書選定について

今年度1年生から新課程となった。新課程に関する教科書選定について協議を進めている。7月初旬に教科書選定を終了する予定。

3. 協議（テーマ：「茨田高校のこれからの3年間について」）

（本校）

生徒たちの精神年齢が低下している印象。「やってはいけないこと」が生徒にも保護者にも理解が、昔に比べて低下している印象がある。経験のある教員が抜けたこともあり、教員も生徒対応に苦勞している。

（議長）

2. における茨田高校からの説明を聞いて、校長の情熱と決意を感じる。それがどれだけ教員に伝わっているのか興味深い。担任以外に相談できる人がいることが非常に重要である。生徒の人数が減っていくほどに、クオリティの高い指導ができるはずだと期待している。

「茨田高校のこれからの3年間について」ということで、進路指導と行事に関してアイデアについてもご意見をいただきたい。

（協議委員）

生徒たちは自己肯定感が低いのだろうと思う。これは、いじめ、さらにはこれからの行事にもつながってくるのではないかと。生徒の長所をみつけて褒めてあげることがどんどん増えていけばいい。勉強だけでなく行事や部活動など、なにか褒めるところを積極的にみつける取り組みがあるとよいのではないかと。

（協議委員）

子どもたちの精神年齢の低下については、年々幼くなっているという見方もあるが、「教えられていないだけ」の面もある。「自分のために勉強しましょう」ということよりも「誰かの役に立つ勉強をしましょう」という方が、自己肯定感につながる教育なのではないか。例えば、部活動のチームプレーの中で活動することで育っていく精神などがそれなのではないか。誰かが喜んでくれる一つひとつの活動が自己肯定感を支える最も効果的なことなのではないか。

もうひとつは、生徒たちの言葉に重点をおくことも必要。話をするときにはどうすれば伝わる話し方なのか、これはまさしくコミュニケーション能力である。

（協議委員）

高等学校統廃合において、3年間の計画を立てようと検討を進めていった経験がある。茨田高校もそのような計画を策定していく時期なのではないか。そのなかで、「仲間を増やす」ことがいい。PTA

や地域などをどんどん巻き込んでいくといい。3年後に素晴らしい閉校式が行われることを望んでいる。

(協議委員)

生徒は、茨田高校の説明会で聞いた先生の言葉を聴いて、茨田高校に決めた。大人の人の言葉に対する反応は、意外としっかりしている。茨田高校で自分のことを認めてもらって子どもは成長していくのだと感じている。よく見てもらっているし、よく気づいてもらっている。毎日、学校のことを話してくれるし、その言葉に嫌味はない。学校は、“ヤンチャな”“大変な”生徒だけではなく、影が薄いというかそういう生徒のことをもっと見てあげてほしい。

(協議委員)

いじめのところでの話だが、生徒たちに「先生に行っても無駄なんだ」と感じさせないことが重要。そのためには、生徒へのフィードバックをすることが必要。小さなサインが見えなくなってしまう。

コロナの2年間で壊れた対人関係などの経験不足に対しては非常に危惧している。教員の「聴く力」を養成することが重要。開かれた質問をする力はもちろん、聴いてあげる余裕づくりが重要。

人から「ありがとう」と言われることが一番自己肯定感をあげるものである。コロナで壊れたものの最大のもはこれかもしれない。

不登校に関しては、不登校問題詳しい教員を派遣してもらうこともできる。

これからの時代を生きる生徒に必要なこと、それは生徒たちと対話をしながら考えていけばいいのではないか。

(協議委員)

これからの3年間について。地域をもっともっと巻き込んでいってほしい。先生は仕掛け人となるのがいい。それが難しいが。生徒たちが「ありがとう」といわれる場面をつくってほしい。冒頭の校長の情熱が教員に、生徒に伝わることを切に望んでいます。

4. 謝辞

第2回予定 令和4年11月10日(木) 15:30～